古態本『平治物語』の世界とその関連

橋口晋作

キーワード　軍記・古態・関連・平治物語・愚管抄・今鏡

『平治物語』は、保元の乱に続いて都で起こった平治の乱を扱った軍記である。この『平治物語』がどのような作品世界をもち、それが他の作品とどのような関連をもっているかということを、新日本古典文学大系版『平治物語』[1]を使い、慈円の『愚管抄』[2]、嘉応二（一一七〇）年成立の『今鏡』[3]、半井本『保元物語』[4]、更には『義経記』[5]、覚一本『平家物語』[6]等と比較・検討して論じてみたい。

平治の乱が勃発した平治元（一一五九）年も、『愚管抄』の著者慈円は未だ五歳に過ぎなかった。『愚管抄』の平治の乱関係記事は、承久二（一二二〇）年六十五歳の慈円が六十年前の乱について調べ、纏め上げた記録・考察である。それでも、二歳に過ぎなかった時代の保元の乱関係記事に較べると、自身の記憶に頼れるところもあったのではないかと思われる。一方の『平治物語』は、現在、成立の上限が、天皇の普段着姿や大内裏の構造の描写・設定から一二二〇年代、下限が宗性上人編著『春華秋月抄草』の寛元四（一二四六）年とされている。そして、『保元物語』や『平家物語』の原本もほぼこの期間に踵を接するように成立したのではないかと考えられている。[7]

新日本古典文学大系版『平治物語』は、平治の乱の合戦描写が前半に偏り、その一方、後日譚が延々と続き、頼朝による平氏の討伐にまで及んでいる。また、内裏に軟禁されてしまった後白河上皇、二条天皇の奪回など『愚管抄』の記述と異なるところも多く、人物設定などに物語的虚構も多いと考えられる。

考察は、最初に『愚管抄』が平治の乱をどのように記しているかを述べ、次ぎにこの『愚管抄』の記述に『今鏡』を加え、これらに対して『平治物語』で最も古態を留めると評される第一類本がどのように描いているかを対照して、物語的特徴を浮き彫りにして行く。その後、半井本『保元物語』や『義経記』、覚一本『平家物語』とも比較して、その関連を考察するという方法を採りたい。

ところで、周知のように第一類本には完本はない。ただ新日本古典文学大系版『平治物語』は、第一類本の陽明文庫蔵（一）本の上巻に学習院大学図書館蔵本の中・下巻を取り合わせたものであるが、古態本の姿をうかがうにはこれが便利だと考えるので、この版を使うことにした。

『愚管抄』の描く平治の乱

『愚管抄』の巻第五は、冒頭部で保元の乱の処理について、死刑が復活したが、それについては賛否の意見があったことを記し、直ぐに乱後の後白河天皇の仏道修行に転じる。筆者は、前者は巻第四の保元の乱関係記事の続きと考えるので、後者の後白河天皇の仏道修行から平治の乱に関わる記事と考えて考察して行くことにする。

さて、平治の乱は、藤原信頼と源義朝が宿敵信西入道を討つ第一段階と、朝廷を制圧したかに見えたこの一派が平清盛を中心とする朝廷勢力に滅ぼされる第二段階、更に義朝の子頼朝が流されるまでの乱後の処理、乱の後日の三つに分けることが出来る。

『愚管抄』の平治の乱関係記事は、前に記したように後白河天皇の仏道修行を語る文で始まる。次いで、法性寺殿忠通がかつて鳥羽上皇の時代に提案して許されなかった大内裏の再建を、信西がこの時期に

易々と成し遂げたことが記される。その新造の内裏で後白河天皇は法華懺法などを行っていたが、保元三（一一五八）年に二条天皇に譲位して、院政を開始した。

後白河上皇は、藤原信頼を寵愛して、権中納言・右衛門督に昇進させた。一方、信西は俊憲以下沢山の子供を持っていたが、皆勝れた才能の持ち主で、それぞれに然るべき職に就いていた。信頼は、この信西を妬ましく思うようになった。

義朝と清盛は、保元の乱の後、覇権を競っていた。義朝は、信西の子供の是憲を婿に取りたいと申し入れたが、信西は学生と武門では合わないからと言って、拒絶した。ところが、間もなく、紀二位所産の成範を清盛の婿にしてしまった。信西は賢明な男であったが、覚えず「カヤウノフカク」を犯して、義朝の恨みを買ってしまった。

信西は、後白河上皇の三条烏丸の御所に俊憲達と詰めていた。信頼と義朝は、信西一家を滅ぼそうと、この御所を取り囲んで火を懸けた。御所の中門に、信頼方の源中納言師仲が御車を寄せて、上皇と上西門院とを乗せた。信西の妻紀二位は、こっそり上西門院の御衣の裾に隠れて、一緒に乗って出た。御車には、義朝方の武士が付いて、上皇達を一本御書所に押し込めた。

御所には、信西の子供俊憲、貞憲がいたが、二人とも隙を見て逃げ出した。信西は、襲撃を察知して、左衛門尉師光達と共に大和国田原に逃れた。そこで、信西は穴の中に埋めてもらった。師光は、外国（宋）へでも逃げるよう勧めたが、信西は覚悟を決めていた。師光達は皆出家して、それぞれ西光などの法名を信西に付けてもらった。

信頼は、二条天皇を内裏にお連れして、実権を握った。そして、除目を行って、義朝を四位、播磨守に補任したりした。一方、信西は、旨く隠れおおせたと思っていたが、源光保が夫輿かきの話を聞きつけて、田原に探索の手が伸ばされた。師光が穴の口から注意を促したが、遂に見つけ出されて、首を取られた。信西の子供は、悉く流罪に処せられた。ここまでが第一段階である。

京で信頼、義朝の暴挙があった時、清盛は熊野詣での途中で、二川宿にいた。使者から京の事変を知らされた時、側には基盛、宗盛の二人の子供と十五人の侍がいるだけであった。対応に苦慮している清盛に紀伊国の武者湯浅宗重が手勢を差し出して、京に戻るよう進言した。熊野の別当堪快は武具を提供した。そこで、清盛は熊野へは代官を立てて、直ぐ十二月十七日に京に帰った。義朝は、軍勢が集まっていなかった為か、何も手出しをしなかった。

一方、三条内大臣公教を始めとする廷臣達は、政権を握った信頼、義朝達には正しい政治を行える人がいないと憂慮していた。そして、信頼に組していた二条天皇の外舅の大納言経宗、検非違使別当惟方も、これらの人々と、清盛の六波羅邸に天皇をお移ししようと計略を練った。行幸当日の朝、廷臣達の計らいで、信頼達の警戒を緩める為に、清盛の名簿を信頼に提出した。内裏脱出の計略は、内の非蔵人尹明が務めた。

夜に入って、上皇の一本御書所には惟方が参上して計略を告げた。上皇に対する警戒は緩やかであったので、上皇はやすやすと脱出した。天皇の方は、尹明が手慣れた者で、一人で天皇を御車に導いた。また、伊予内侍、少輔内侍の二人が協力して、璽箱と宝剣を御車に入れた。そして、火事を起こして、守衛が気を取られている間に無事六波羅にお連れした。火事が治まった後、信頼は心配ない旨天皇に伝えるよう伊予内侍に告げさせた。「お伝えしましたよ」と言って、二人の内侍は内裏を脱出した。尹明は更に長櫃に調度の宝物を入れて、行幸の後を追うようにして六波羅に入った。

六波羅には、二条天皇が入られた後、後白河上皇等が次々と集まった。関白基実も、法性寺殿忠通に連れられ六波羅に来た。基実は、信

頼の妹を妻としていた。公教は基実の扱いを気にしたが、清盛は結構なことと問題にしなかった。この夜中に、天皇が六波羅に移られたということが知れ渡った。白河房の法性寺座主覚快法親王の許にも、天皇の為に祈るようにという使者が来た。

内裏では、信頼、義朝、師仲達が途方に暮れていた。信頼は義朝に「日本第一ノ不覺人」とののしられた。師仲は、信頼が大刀契の唐櫃の小鈎を守り刀に付けていたので、神鏡と一緒にしたがよかろうと言って、預かった。義朝は甲冑に身を固めて、出立した。信頼、師仲もその後に付いていたが、小路に入って、ばらばらになった。

六波羅からは直ぐに内裏に攻め寄せて来た。義朝は、六波羅で討ち死にしようと、六波羅に攻め寄せた。平氏では、左衛門佐重盛と三河守頼盛が大将軍を務めた。重盛は、馬を射られて、堀河の材木の上で馬を乗り換え、鎧に矢が立ったままで六波羅に帰って来た。義朝が六波羅邸の鰭板際まで攻め寄せて、騒然となった時、清盛は、「見回って来ます」と言って、黒装束に身を固めて、頼もしく打っ立った。合戦の間、比叡山の重輸が六波羅に参上していて、比叡三宝に祈念していた。

義朝は、郎等十人足らずになってしまったので、京から退却した。義朝は、東国に下って挽回しようと考えたので、大原から近江の方に落ちて行った。鎌田正清も同道していた。

清盛は、大内裏の信頼の宿所で、前日出した自分の名簿を取り返した。信頼は、仁和寺の御室に逃げ込んだが、覚性法親王から六波羅に突き出された。信頼と藤原成親は清盛の前に引き据えられた。信頼は弁解に務めたが、清盛は聞き入れず、六条河原で斬首された。成親は、信頼に誘い込まれただけであったので、たいした処罰にはならなかった。信頼に荷担した武士達も程々に処罰された。

義朝は、徒歩で尾張国まで落ちて行って、正清の舅、内海荘司平忠致の家にたどり着いた。忠致は湯浴みを準備して歓待を装っていたが、正清が気配を感じて、義朝に急を告げた。義朝は正清に頸を打たせ、正清も自害して果てた。忠致は、義朝の首を京に届けた。義朝の首は獄門の木に懸けられたが、それを詠んだ落首が評判になったりした。ここまでが第二段階である。

信西の子供は、又全員召し返された。永暦元（一一六〇）年、二条天皇の親政を進めようとしていた経宗、惟方が、上皇の命を受けた清盛によって逮捕された。一月後、彼らは、流罪に処せられたが、その時、源頼朝も伊豆国に流されたのであった。以上が『愚管抄』の乱後の処理、乱の後日である。

古態本『平治物語』の世界と『愚管抄』・『今鏡』

前章では、平治の乱を『愚管抄』がどのように纏めているかを記したが、ここでは歴史資料として『愚管抄』よりも五十年前に成立した『今鏡』を加え、これらの歴史資料に対して新日本古典文学大系版『平治物語』（以下、古態本と略称する）が、平治の乱をどのように語っているか、対照しながら考察して、古態本の物語性を明らかにしてみたい。

さて、古態本は、藤原信頼と源義朝が信西入道を討つ平治の乱の第一段階を「信頼・信西不快の事」、「信頼、信西を亡ぼさるる議の事」、「三条殿へ発向付けたり信西の宿所焼き払ふ事」、「信西の子息闕官の事」、「信西出家の由来付けたり除目の事」、「信西の首実検の事付けたり南都落ちの事并びに最後の事」、「信西の首大路を渡し獄門にかけらるる事」の七章段で語って行く。この中「信西の子息闕官の事」は、『愚管抄』ではこの位置に該当する記事はない。

古態本の最初の章段「信頼・信西不快の事」は、「王者の人臣を賞

する」法を論ずる序文で始まる。「王者の人臣を賞する」法は、「文武二道を先」とすることにあるが、末代にあっては、「よく用意をいたし、せん〳〵抽賞せらるべきは勇悍のともがら」であると、語り手は論じる。この序文は「『武』の必要性が公然かつ明確に認知されるに至った時代」を反映したものと捉えられているが、[8] 作品内では、この章段の主人公信頼以上に義朝に関係する内容となっていると考える（後述参照）。従って、この序文は、作品全体の序であり、乱の第一段階の序でもある。

序文の後、古態本は、信頼の紹介から始め、「文にもあらず、武にもあら」ぬ信頼が「家にたえてひさしき大臣の大将にのぞみをかけ」るという設定をしている。信頼の希望は、後白河上皇から信西に伝えられ、相談されるのだが、信西は「君の御まつりごとは、司召をおゐてさきとす」と言って、上皇を諫める。信西に就任を拒まれた信頼は、信西を討とうと考えるというのが古態本の展開である。これは、『愚管抄』と異なるが、『今鏡』は「御覚えの人にて、如何なる官もならむと思ふに、入道諫むるをいぶせく思ひて、軍を起したりける」と記しているので、古態本は、『今鏡』を具体化しながら語り出していると認められる。それでも、信頼について『愚管抄』と同様に「御覚えの人」とは言っても、「文にもあらず、武にもあらず、能もなく、又、芸もなし」などと決めつけてはいない。ところで、古態本は、信西の諫めに納得しない後白河上皇を語り出している。章段冒頭に置かれていた序は、「王者」である後白河上皇に関わるものとなっていて、その点では、後白河上皇は「王者」の弁えのない上皇と批判されることになる。しかし、古態本は、後白河上皇批判を正面に据えることなく、信頼と「王者」の道を説く信西の対立という形に物語の方向を収めてしまうのである。

「信頼、信西を亡ぼさるる議の事」も、引き続き『今鏡』を具体化する形で語り出されているとみられる。その際、古態本は、信頼が、清盛は「朝恩にほこり恨みなかりければ、よも同意せじとおもひ」、義朝に近付いて仲間に引き込んだとしている。義朝が「保元のみだれ以後、平家におぼえ劣りて不快者」であったといったことは、『愚管抄』には全く出て来ない。『愚管抄』は、「各コノ亂ノ後ニ世ヲトラント思ヘリケル」と記していて、義朝、清盛の覇権争いがもう一つの理由であったという書きぶりである。従って、古態本は、序の「よく用意をいたし、せん〳〵抽賞せらるべきは勇悍のともがら」であるという主張に沿って、乱の発現を語っていると言えよう。同時に、義朝は、朝廷内の事情に暗い、無骨な武将として描かれ、虚を突かれる形で、謀反に巻き込まれて行ったということになっている。

古態本では、経宗、成親、惟方を語らった後、信頼は機会を覗う。そこに、清盛が嫡男重盛を伴って、熊野参詣に出発する。この隙を捉えて、信頼は義朝に、信西は紀伊二位の夫という地位を利用する姦臣で、自分達を讒訴していると讒言して、信西を討つ決断をさせる。このように、古態本は、信頼を中心にして、人々の動きを追い、時間軸に沿って事件を展開させて行く。これに対して、『愚管抄』は、事件の展開を中心に記述しているので、時間が前後し、清盛の熊野詣では三条殿焼き討ちの後に記されていた。

「三条殿へ発向付けたり信西の宿所焼き払ふ事」では、上皇の御所三条殿を取り囲んだ信頼が「信西が讒によつて誅せらるべきよし承候あひだ、かいなき命をたすけ候はんとて、東国がたへこそまかり下候へ」と告げて、驚く上皇をせき立てて車に乗せたとしている。また、『愚管抄』では、三条殿の北の対の縁の下にいた俊憲が「見マハシケルニ逃ヌベクテ、焔ノタヾモエニモエケルニ、ハシリイデ、」逃げたと記しているが、古態本はこのことには全く触れず、宿直していた公卿・殿上人・女房達が「矢におそれ火をかなしむるは、井の中へこそ

とび入」り、折り重なって死んだと述べている。「此仙洞の回禄には、月卿雲客の命を堕すこそかなしけれ」と語るが、衛門尉二人を討ったことの他には死者の名前は挙げられていない。

「信西出家の由来付けたり除目の事」で『愚管抄』が記すのは、「除目行ヒテ、義朝ハ四位シテ播磨守ニナリテ、子ノ頼朝十三ナリケル、右兵衛佐ニナシナドシテアリケル」ということだけである。古態本は、「はなはだしく勧賞おこなはれ」て、左大臣伊通が一番働いたのは井戸ではないかと皮肉ったと語っている。「信西出家の由来」では、父親信西はやっと少納言になれただけであったが、「その子どもは、七弁の中に加り、上達部に至、中少弁をぞけがしける」と、子息の出世、繁盛を語っている。この後白河上皇下での子息の出世は、『愚管抄』も『今鏡』も記すところであった。

「信西の首実検の事付けたり南都落ちの事并びに最後の事」で古態本は、信頼方の源光保が信西の首を取って来たことを語った後、時間を遡って信西の最期までを語る。信西が夜討ちを察知して姿をくらましたことは、『愚管抄』も、『今鏡』も記している。『愚管抄』では穴の中に身を隠したという印象だが、古態本では「信西がかはりまいらせずしては、たれ人か君をたすけまいらせん」という決意が強調されている（『平治物語繪巻』[9]にはあっさり「伊賀國境北の山中にて、自害してほりうすまれたりける」とある）。興味深いことは、古態本が西光が同行していなかったとしていることである。

「信西の首大路を渡し獄門にかけらるる事」は、『愚管抄』では「イミジガホニ以テ參リテワタ（シ）ナンドシケリ」とあるだけである。古態本は「此人ひさしく存ぜしかば、国家もいよ〳〵泰平ならまし」と、その死を惜しむ。古態本の信西は一貫して「王者」の世を実現出来る人物として語られて来ていた。

『愚管抄』の該当する場所にない「信西の子息闕官の事」で注目されることの一つは、信頼・義朝蜂起の急を聞いて貴族が内裏に駆けつけたとし、その筆頭に「大殿・関白殿」を挙げることである（『平治物語繪巻』も同じ）。『愚管抄』は、貴族が急を聞いて駆けつけたといったことは全く記していない。もう一つは、『愚管抄』が義朝の恨みを買うことになったと記している清盛の婿成範が六波羅に逃げ込んだが、清盛不在の為に保護してもらえなかったと語っていることである。こちらは、『愚管抄』を踏まえた虚構のようにも見える。

平治の乱の第二段階は『愚管抄』と同じく「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」で始まるが、その終わりは常葉と三人の子供の物語にとけ込んでいて、乱後の処理、乱の後日が語られる下巻の「頼朝遠流の事付けたり盛康夢合せの事」まで一続きになっている。この間、中巻は義朝が六波羅に押し寄せるところから始まり、下巻は、扱いが問題になっていた頼朝が死を免れるところから始まっている。

「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」で『愚管抄』と一致するのは、清盛が熊野詣での途上であったということと、清盛が対応に苦慮したという大筋で、細部は以下のように大きく異なる。『愚管抄』では「二タガハノ宿」に「カクリキ」が走り来て急を告げたと記されていたが、古態本は切目の宿と場所が異なり、また、百騎程になったところで更に、途中に悪源太義平が待ちかまえているという噂が伝わるという設定になっている（下巻「悪源太誅せらるる事」参照）。『愚管抄』によれば同行していたのは基盛と宗盛であったが、古態本では重盛となっている。この重盛は、悪源太義平の噂を聞いて弱気になり、西国落ちを考え始めた清盛に対し、直ぐさまとって返すよう進言して、筑後守家貞を感動させることになっている。また、一行に武具を提供したのは、『愚管抄』では湛快であったが、一行の家貞となっていて、重盛に「まことに武勇の達者、思慮ふかき兵」と感心されている。更に、『愚管抄』で「ソノ時ハヨキ勢」であったと紹介さ

れている湯浅氏など紀伊の家人は名前も出ず、義平の軍勢と誤報された伊藤武者景綱、館太郎貞保など伊勢、伊賀の家人の動きが古態本では頼もしく語られている。

「光頼卿参内の事付けたり清盛六波羅上着の事」で、『愚管抄』と一致するのは「清盛六波羅上着の事」の「（清盛は）京へ入ニケリ。スベカラク義朝ハウツベカリケルヲ、東國ノ勢ナドモイマダツカザリケレバニヤ、コレヲバトモカクモサタセデアリケル」に当たるところだけである。「光頼卿参内の事」は、『愚管抄』には全く出て来ない。

「院の御所仁和寺に御幸の事」・「主上六波羅へ行幸の事」の二章段だが、『愚管抄』は、前章に記したように上皇や天皇の脱出を描く場面の前にそれ以上の分量で、その計略が練られて行った過程を描きだしていた。このことに全く触れない古態本では、この前の「光頼卿参内の事」が脱出を導く動きを描く章段の役を果たしていると考えられる。すなわち古態本は、光頼が「大剛の人」で、信頼方に付いていた惟方を諫め、天皇、上皇の様子を惟方から聞き出し、この光頼に従って「院の御所仁和寺に御幸の事」では下の弟成頼が上皇の脱出の共をし、「主上六波羅へ行幸の事」では弟の惟方が脱出を手伝ったと、勧修寺家の三兄弟の働きとして語るのである。二条天皇が女装し、中宮や紀二位も同車していたなどというようなことは『愚管抄』には全く出て来ない。

「信頼方勢ぞろへの事」は、信頼が天皇、上皇に逃げ出されたことを知るところから武装して結集するところまでである。古態本には、『愚管抄』が詳しく記す師仲が登場せず、変わって成親が信頼の側にいる。従って、師仲が語ったという「義朝ハ其時、信頼ヲ、日本第一ノ不覚人ナリケル人ヲタノミテ、カヽル事ヲシ出ツルト申ケルヲバ、少シモ物モエイハザリケリ」という場面もここにはなく、まだ信頼、義朝の主従の関係の変化も語られていない。

「待賢門の軍の事」で『愚管抄』と大きく異なるところは、六波羅からの寄せ手が内裏が火災にあったりしないよう、義朝や信頼を内裏から誘い出す作戦の下で行動したとしていることである。前記の義朝が信頼を罵倒したという事は、鬨の声に足が震えて馬に乗れない信頼を見て、「知（ず）して、与して憂き名をながさん事よ」とつぶやくことに変えられている。『愚管抄』の記す重盛、頼盛が平家軍の中心として戦ったということはそのとおりであるが、古態本は義朝の嫡男義平を登場させて、その一騎当千の活躍を描き出すことを主軸としている。源氏、平氏の若い大将同士の戦いが繰り広げられ、古態本の合戦場面の中心となっている。また、「待賢門の軍の事」は非常に長い章段となっていて、この章段で上巻が終わる。

中巻は、義朝軍が六波羅に押し寄せる場面で始まり、義朝の妾常葉母子が京から大和に落ちて行く場面で終わっている。

中巻の最初の章段「義朝六波羅に寄せらるる事付けたり信頼落つる事并びに頼政平氏方につく事」は、『愚管抄』にある六波羅が皇居になったことを知らせたという記事や「京ノ小路ニ入ニケル上ハ、散々ニウチワカレニケリ」を踏まえて、信頼が六波羅に結集している軍勢を見て逃げ出す場面から始まる。引き続き、源頼政の心変わりを察知した義平と頼政軍との小競り合いとなるが、『愚管抄』は頼政の動きには言及していない。なお、この章段に義朝の童金王丸が始めて登場する。

「六波羅合戦の事」では、『愚管抄』のように清盛が頼もしく出陣する場面が語られる。後半は、平家方に付いた頼政と義朝の言葉戦い、そして、義朝が六波羅から撤退する場面となっている。合戦は冒頭に「悪源太、川はせわたして、父と一手に成ツて、六波羅へ向てぞかけたりける」として語られるが、義朝勢の名寄せ以上には出ず、「待賢門の軍の事」の合戦描写に遠く及ばない。

「義朝敗北の事」は、従者斎藤別当実盛達が機転を利かせて戦い、次々と味方を失いながら義朝主従が落ち延びて行く様を語る。『愚管抄』にはこのような具体的な場面はない。また、その途中で信頼と出くわすという設定も、『愚管抄』にはない。

「信頼降参の事并びに最後の事」では、信頼が後白河上皇のいる仁和寺に出頭したところに、途中から言及されなくなっていた師仲、成親も出頭して来たと、作品世界に再登場する。『愚管抄』では、信頼と成親は清盛の前に並んで引き据えられたことになっていたが、古態本では重盛が信頼を尋問したことになっている。成親も死罪となっていたが、「重盛出仕の時は、毎度、情をかけて申承るよしなりける」お陰で、重盛に救われたとしている。『愚管抄』では「フカヽルベキ者ナラネバ、トガモイトナカリケリ」と書かれていて、大きく異なる。

「官軍除目行はるる事付けたり謀叛人賞職を止めらるる事」は、『愚管抄』に記述がない。この章段の次ぎ「常葉註進并びに信西子息各遠流に処せらるる事」からは、「金王丸尾張より馳せ上り、義朝の最後を語る事」、「常葉落ちらるる事」、「常葉六波羅に参る事」と、『愚管抄』に登場しない義朝の愛妾常葉と三人の子供の物語が目に付く。

「信西子息各遠流に処せらるる事」は、上巻の「信西の子息遠流に宥めらるる事」、下巻の「経宗・惟方遠流に処せらるる事、同じく召し返さるる事」の章段で語られる召し返しと一連の内容で、『愚管抄』にも『今鏡』にも流され、召し返されたことが記されている。重憲の配所下りが後半を占めているが、これは『今鏡』にあり、古態本はこの『今鏡』の記事を基に道行きに仕立て上げたと見られる。

『愚管抄』にある義朝の最期は、古態本では、義朝の童金王丸から常葉に報告されたという枠をもって語られる。金王丸の話は、「義朝敗北の事」を踏まえた、都落ちの行路で始まっている。そして、頼朝、義平との別れ、朝長の最期、上総介八郎広常との別れを語った後、義朝の死となっている。『愚管抄』は「正清主ノ頸打落テ、ヤガテ我身自害シテケリ」と記していたが、古態本では正清は先に討たれていたとする。

「長田、義朝を討ち六波羅に馳せ参る事付けたり大路渡して獄門にかけらるる事」では、『愚管抄』にある「下ツケハ」の歌が語られる。『愚管抄』は太政大臣伊通の作かとし、「コレ程一文字モアダナラヌ歌コソナケレ」と評されたことを記しているが、古態本はここに伊通への言及はない。その代わりに藤六の歌に将門の首が笑ったという説話を語って、不気味さを漂わせている。古態本では、伊通は、前記の井戸の他に、惟方の「中小別当」というあだ名（『愚管抄』に記されている）を解説したり、「信頼は、一日のいくさに、鼻かきてけり」と言ったり、下巻では更に「いつか又、ひゑの大臣出来むずらん」と言ったりして、鋭い言葉を吐く人として登場している。[10]

『愚管抄』にない「悪源太誅せらるる事」では、義平が難波三郎に白昼に切られ、「雷と成ッて、清盛をはじめ汝に至まで、一〻に蹴殺さんずるぞ」と言ったことを語り、下巻の「悪源太雷電となる事」に続けている。また、ここの義平の言葉によれば、上巻「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」で伝えられた義平の待ち伏せは、実際彼が参詣途上の清盛一行を追い討ちしようと献策していたことになっている（なお、後記「古態本『平治物語』と半井本『保元物語』」の章でもこのことに触れる）。同じく『愚管抄』にない、次の「忠宗非難を受くる事」は、勧賞に不足を言う長田庄司を語っていて、これも古態本の下巻、結末に続いて行く。

「頼朝生け捕らるる事」は、平治の乱の合戦に参加した者の最後の逮捕記事で、ここが一つの切れ目となるべきところであるが、前記のように義朝の愛妾常葉の物語が始まり、次の「常葉落ちらるる事」の

章段で常葉所生の三人の幼い弟たちの運命が絡んでくるので、ここが切れ目とはなりえていない。中途半端であるが、「常葉落ちらるる事」が中巻末に据えられたのは、命の保障がない状況に止め、下巻への関心を高めて終わるという手段からなのであろう。

下巻冒頭の「頼朝死罪を宥免せらるる事付けたり呉越戦ひの事」は、先の「頼朝生け捕らるる事」や後の「頼朝遠流の事」と一連の章段である。この章段では、清盛の継母で頼盛の母の池殿が「人のなげきをあわれみて思ふ人」で、頼朝の助命を重盛を介して清盛に訴えたことが語られる。重盛の話を聞いて困惑する清盛は納得されるが、当の頼朝が早くも「八幡大菩薩おはしましけり。命だにたすかりたらば、などか本意をとげざらむ」と思うというのは、古態本の下巻の有り様と関わっていよう。

「常葉六波羅に参る事」は、平家が捕らえようとした源氏全員が捕まったところであるが、頼朝の三人の幼い弟が死を免れるところともなっている。この章段では、常葉母子に対する清盛の対応は尋常であると思われる（しかし、下巻「牛若奥州下りの事」の冒頭には「情のみち」に迷った清盛が批判的に語られている）。

『愚管抄』、『今鏡』に記されている経宗、惟方の逮捕は、「常葉六波羅に参る事」の次ぎに「経宗・惟方遠流に処せらるる事、同じく召し返さるる事」という章段名で語られる。[11]二人が後白河上皇の前に引き据えられたところまではほぼ『愚管抄』の通りであるが、死罪に定まっていたのを忠通が流罪に申し宥めたというのは『今鏡』によっている。

『愚管抄』が経宗、惟方と同時に流したと記している頼朝の流罪は、この章段の次ぎに「頼朝遠流の事付けたり盛康夢合せの事」という章段名で配される。この章段では、『愚管抄』には全く記事のない、纐纈盛康が「霊夢の告げ」を得て、頼朝の出家を押し留めたことが中心になっている。頼朝の東下りは、義朝の足跡を辿ることになり、長田への復讐が誓われる。そして、この盛康の功績や、長田への復讐がまた最後の章段「頼朝義兵を挙げらるる事并びに平家退治の事」に続くことになる。

「清盛出家の事并びに滝詣で付けたり悪源太雷電となる事」は、『十訓抄』第六「可存忠信廉直旨事」[12]に拠ったものかと思われる。「保元に為義誅せられ、平治に義朝誅せられしより以来、平家の一門、繁盛す」で始まっていて、『平家物語』の作品世界が開幕した時代に設定されている。しかし、古態本は『平家物語』と異なり、出家した清盛が兵庫に経島を築いて殆ど福原に住んだと語る。その兵庫の布引の滝で難波三郎が雷となった義平に蹴殺され、清盛は「弘法大師の五筆の理趣経」の御利益で助かるという内容に改められている。これが、古態本の勇者義平の一連の物語の最後となっている。

古態本の終わり「牛若奥州下りの事」・「頼朝義兵を挙げらるる事并びに平家退治の事」は、平治の乱の後日譚の閾からはみ出している。頼朝が助命される場面からほのめかされていた復讐は、頼朝の平家討伐まで語らざるをえないものとなってはいた。「牛若奥州下りの事」で、常葉所生の三人の子供の中で牛若だけが突出して語られることになるのも、頼朝の平家討伐に関わるからであろう。しかし、平家討伐まで語ってしまえば、主役は常葉所生の子供から頼朝に変わってしまう。このような構想の曖昧さを含みながら、義朝を討った長田庄司、纐纈盛康のその後なども全て語って古態本は終結するのである。

古態本『平治物語』と半井本『保元物語』

前章で、古態本『平治物語』を『愚管抄』・『今鏡』と比較して、古態本が『今鏡』を基にしている点の多いことや、歴史離れ、物語性の

濃厚なこともはっきりして来たと考える。この古態本の物語性、虚構については、『保元物語』の古態本半井本に通じる方法があり、そこから生まれたかと考えられるので、次ぎに半井本と比較しながら、『平治物語』古態本の方法について考察してみたい。

平治の乱と保元の乱では、乱の性格が大きく異なる。平治の乱は上皇側近の私闘が上皇・天皇を巻き込んだものであり、保元の乱は天皇家、摂関家が二派に別れての権力争いであった。また、平治の乱は、信頼・義朝が上皇、天皇を手に入れる第一段階と上皇、天皇を奪い取られて滅亡する第二段階の二つの段階から成っているが、保元の乱は両派が一度激突しただけで、一つの段階しかない。ただ、『愚管抄』の記述量を日本古典文學大系版で見ると、平治の乱の記述と保元の摂関家の対立から乱後の処理まで（『保元物語』の記述範囲）はほぼ同量となっている。

さて、『平治物語』で最も興味深いことは、やはり『保元物語』と同様に三巻に編成されていることである。筆者は、拙稿「軍記『保元物語』の世界―半井本『保元物語』と『愚管抄』との比較を中心に―」[13]で半井本の三巻構成について、「上巻は保元の乱の合戦が始まるまで、中巻は合戦の描写、下巻は乱後の処分という内容」とし、『愚管抄』と較べると、「合戦の描写を中心に、この合戦がいかにして起こり、合戦の後関係者はどのようになったかをそれぞれ均分に描き、保元の乱の全体を描く作品になっている」と述べた。『平治物語』古態本の三巻構成をこの半井本と比較検討して、両本の作品形成の方法について考察してみたい。

半井本は、上巻に崇徳上皇の許に結集しようとしていた宇野親治を捕らえる場面があり、上巻末は正に上皇の御所白河殿に後白河天皇方の軍勢が発向するところとなっているが、本隊同士の合戦そのものは、中巻冒頭の「白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事」に入らないと始まらない。古態本の方も中巻冒頭の「義朝六波羅に寄せらるること付けたり信頼落つる事并びに頼政平氏方につく事」から義朝の生死を懸けた戦いが始まるのであるが、章段名に明らかなように義朝軍の分解が同時に進行してしまう。六波羅での戦いは、従って、頼政軍の帰趨に関わる動きが中心になっていて、合戦場面としては源氏の義平と平氏の重盛が騎馬戦を展開する、上巻末の「待賢門の軍の事」に及ばない。このように合戦場面としては甚だ生彩を欠いたものになってしまっているが、ともあれ、古態本が半井本と同様に本格的な合戦場面で中巻を始めようとしていることは間違いない。

半井本の中巻は乱の勝敗が付いて、中心人物崇徳上皇が捕らえられ、左大臣頼長が息を引き取るまでを語り、下巻はその他の上皇方の逮捕で始まっているので、前記のような分け方と捉えた。古態本の下巻は頼朝が助命される章段で始まり、中巻は常葉の三人の幼い子供の命がどうなるかという、聞き手の関心を高めたところで終わっているように見える。古態本の中巻、下巻の分け方は一見極めて便宜的なものに見えるが、よく見ると配慮の行き届いたものであることが分かろう。古態本の下巻は、これはこれで乱後の処分、後日譚となっている。

古態本の下巻は、頼朝による平家討伐にまで及んでい、『平治物語』の次の時代を対象とした軍記『平家物語』の領域を侵しているように見える。しかし、半井本も、下巻で保元の乱で命を失わなかった崇徳上皇、八郎為朝の死までを語っていい、「新院血ヲ以テ御経ノ奥ニ御誓状ノ事付ケタリ崩御ノ事」では、平治の乱で信西、信頼、義朝が亡んだことを述べ、更に上皇の霊の為に清盛が過分の悪行を働いたことまでが語られていた。平治の乱の場合も、同様に生き残った頼朝や義経のその後を語っていけば、平家討伐に至ることになる。従って、古態本も半井本のように乱で生き残った人の後日を最後まで語るという方法を採った結果、平治の乱の後日譚の領域を超えてしまったので

あろうと考えられる。

『愚管抄』・『今鏡』に記述がなく、古態本の中巻、合戦の勝敗が付いた直後から下巻にかけての物語の中心になっている、義朝の愛妾常葉と三人の子供の物語について、半井本を参考にして考えてみたい。保元の乱では、嫡男義朝だけが後白河天皇方に付き、父為義と義朝の弟達は崇徳上皇方に付いて戦った。乱後、合戦に参加した為義と弟達は全員処刑された。その時、処刑された者は参戦者に止まらず、幼い弟達全員に及ぶことになった。半井本は、その幼い兄弟と母の死を「義朝ノ幼少ノ弟悉ク失ハルル事」、「為義ノ北ノ方身ヲ投ゲ給フ事」の二章段で語っていた。半井本のこの二章段は、聞き手の涙を誘う場面だったと考えられる。常葉と三人の子供の物語は、この半井本の二章段にならって、という以上に三人の子供を生き延びさせる為にさすらう母の姿を新機軸にして語り出されたものではあるまいか。常葉譚は「独立した作品を分割して、物語中に取り込んだ」と想定されているが[14]、古態本の作品世界に是非ともと求められたものであったに違いない。なお、常葉の物語は、義朝の童金王丸を利用して古態本に綯い込まれて行っている。

『平治物語』で義朝軍の中心となって大活躍する悪源太義平も『愚管抄』・『今鏡』には、名前すら出て来ない。半井本に「可然弓取ト生レツキタル」と語り出された為朝は、『愚管抄』に「頼賢・タメトモ勢ズクナニテ、ヒシトサ、ヘタリケルニハ、義朝ガ一ノラウドウ鎌田ノ次郎マサキヨハタビ〳〵カケカヘサレケレドモ」と記されていた。しかし、『愚管抄』では兄頼賢と並記されていて、半井本が描くような抜きんでた働きがあったとは読み取り難い。『保元物語』は、参戦者中最年少でありながら、父為義が解官されるような濫行を九州で働いていた為朝に白羽の矢を立てて、巨人化したのではなかろうか（或いは、奮戦の伝承をとりこんだ）。平治の乱で『愚管抄』の記すのは平家の重盛と頼盛の奮戦である。この二人の相手として古態本が描き出すのが義平である。義平は、対照的に義朝の長子であるが、彼もまた叔父の義賢を殺害し、一騒動起こしていた。『平治物語』も、『保元物語』と同様の視点から義平に白羽の矢を立てたように見える。それにしても、義平が華々しく戦う「待賢門の軍の事」は、本質的には源氏軍をおびき出す作戦に過ぎなかったので、本来は重盛の武勇譚だったのではないかという気がしてならない。

上巻の「六波羅より紀州へ早馬を立てらるる事」で義平の待ち伏せという話は単なる噂に過ぎなかったとされたのだが、先述のように中巻の「悪源太誅せらるる事」によれば、それは実際義平が進言したことであったことになっていた。そして、義平によれば、それは「京家の者共・筆とりが儀」で採用されなかったということであったらしい。「去保元にも今度も」と言って悔しがる義平は、明確に『保元物語』の為朝を先例としているのである。

右のように、古態本『平治物語』は、半井本『保元物語』と同様の方法を用いて虚構を試み、三巻構成に仕立てて行ったかと考えられる。

古態本『平治物語』と『義経記』、覚一本『平家物語』

前章では古態本と半井本とを比較して、古態本が半井本など古態の『保元物語』の方法を参考にして作品世界を作って行ったかと見えるところを指摘したのであるが、最後に『義経記』（以下、義経記とのみ記す）、覚一本『平家物語』（以下、覚一本と略称する）と比較して、『義経記』、『平家物語』との関係を考察して、本論を終えることにしたい。

（イ）古態本と義経記

古態本中巻の「金王丸尾張より馳せ上り、義朝の最後を語る事」で

金王丸から告げられる朝長の最後は義経記「義朝都落の事」の記述と一致している。また、同章段と「悪源太誅せらるる事」で語られる義平の動きも義経記同章段の記述に酷似している。異なるのは、古態本で「甲斐・信濃へ下て、山道より責上れ」と命じられ、飛騨に下ったとなっているのが、義経記では「北國の勢を具せよとて越前へ下す」と語られていることである。

しかし、常葉が都から逃げ下り、清盛の許に出頭するまでは、義経記の「常盤都落の事」と一致することはない。ただ、古態本の「牛若奥州下りの事」の冒頭で語られる「情のみち」に迷う清盛は、義経記のこの章段にもっと俗悪に語り出されている。

また、「牛若奥州下りの事」、「頼朝義兵を挙げらるる事并びに平家退治の事」の義経関係記事も意外に義経記に一致するものがない。

右のような関係から両本を見ると、義経記が物語を始めて直ぐから古態本とは別の世界を目指して行ったもののように見える。

（ロ）古態本と覚一本

古態本下巻の「清盛出家の事并びに滝詣で付けたり悪源太雷電となる事」の冒頭部については、既に、新日本古典大系版の脚注[15]で「二代后」、「吾身栄花」、「禿髪」の三箇所からの影響が指摘されている。『平家物語』の影響が疑われるところは、古態本冒頭「信頼・信西不快の事」で信頼の近衛大将就任希望が信西への武力行使に発展するという設定が、覚一本の「鹿谷」で新大納言成親が近衛大将就任運動をして、謀議に発展するのに似ている点などもある。信頼、信西の対立の理由は『愚管抄』にも『今鏡』にも記されていない。

このように古態本は、下巻の後日譚部だけに止まらず、そもそもの発端部から『平家物語』と深い関係をもっているのではないかと考えられる。

まとめに代えて

本稿において、筆者は、先ず『愚管抄』が平治の乱の第一段階、第二段階、乱後の処理をどのように記述しているかを考察した。『愚管抄』は事件の展開を追って記述していて、清盛の熊野詣では第二段階の最初に記されていた。また、乱後の処理はごく僅かのことしか記されていなかった。

次ぎに、古態本と『愚管抄』、『今鏡』とを比較して、古態本の物語性について考察した。古態本が『今鏡』に記事のあるところはそれを基にして作品世界を作って行っているように見えることを指摘した。一方、古態本と『愚管抄』とは細部で相当に異なり、古態本が独自に物語り世界を築いていることもはっきりしたかと考えている。

次ぎに、古態本を『保元物語』の古態本、半井本と比較して、作品形成の方法を考察してみた。古態本の三巻構成、合戦の中心人物の設定、登場人物の成り行きを徹底的に追って行く方法など多くの点で半井本と共通する方法が見られることを確認した。また、軍記として眺めると、古態本は相当無理して合戦場面を作り上げているようだし、その場面も前半に偏っているという印象が強かった。

最後に『義経記』、『平家物語』の覚一本と比較して影響関係を考察した。義経記とは朝長と義平の最期がほぼ一致するが、義経に関するところはまったく別の内容であった。覚一本とは、後日譚に表現の近似する箇所のあることが既に指摘されているが、古態本の第一章段から関係を思わせる設定のあることを指摘した。

『愚管抄』・『今鏡』以外の作品は、複雑な関係をもつ諸本のあるところであるが、本稿では便宜上、特定の古態本を取り上げて考察したので、先行研究を充分に踏まえることが出来なかった。この点は、今

後もっと問題を絞って、詰めて行くこととしたい。

注（1）日下力氏校注（平成四年七月）。
（2）日本古典文學大系版（昭和四二年一月）。
（3）講談社学術文庫版（昭和五九年三月）。
（4）新日本古典文学大系版（平成四年七月）。
（5）日本古典文學大系版（昭和三四年五月）。
（6）日本古典文學大系版（昭和三四年二月）。
（7）（注1）『保元物語　平治物語　承久記』の日下氏「平治物語解説」によった。
（8）（7）に同じ。
（9）日本繪卷物全集（昭和三九年一二月）。
（10）（7）によれば、日下氏は、伊通の周辺に作者を想定していられる。
（11）この事件は、覚一本「二代后」で語られる永暦・応保の上皇、天皇の対立による事件の一つになっていると考えられている。
（12）石橋尚寳『十訓抄詳解』（明治三五年七月）によった。
（13）『人文』（平成二〇年八月）。
（14）日下力『平治物語の成立と展開』（平成九年六月）など。
（15）日下氏担当。

（二〇〇八年十月一日　受理）